

日本女學讀本

卷七



K230.8

59

7

下田
523

下田歌子監修
帝國婦人協會編

日本女學讀本

東京株式會社明治書院

文部省圖書
新 6783
第8冊

1951文部省登録

日本女學讀本卷七目次

- 一、明治天皇の御聖德……………池邊義象……………一
- 二、昭憲皇太后十二徳の御詠……………六
- 三、丹雪花……………芳賀矢一……………一〇
- △四、熊野謠曲……………一四
- 五、櫻靜ひ狂言……………二五
- 六、笑ひ草……………三宅花岡……………三〇
- 七、出産を祝ふ文 同返事……………三七
- 八、家庭……………加藤咄堂……………三八

檢定
文部省
圖書

目次

九、親族……………	添田 壽一……………四五
一〇、保險の話……………	栗津 清亮……………五二
一一、勸農の詞……………	小林 一茶……………五六
一二、草刈女唄文……………	吉野 臥城……………六〇
一三、戊申の昔譚……………	小金井きみ子……………六三
一四、女流文學……………	藤岡作太郎……………六九
一五、ヅイクトリヤ女皇その一……………	下田 歌子……………七六
一六、同……………	その二……………八五
一七、一兵士の其の妻に與へたる遺書……………	九一
一八、平家の都落……………	高山 樗牛……………九四
一九、忘れ難き此の日……………	姉崎 嘲風……………九七

二〇、失意の友を慰むる文 同返事……………	一〇二
二一、俚諺十則……………	一〇六
二二、吾が輩は猫である……………	夏目 漱石……………一〇七
二三、洪水……………	建部 綾足……………一一一
二四、信越紀行その一……………	下田 歌子……………一二八
二五、同……………	その二……………一二二
二六、東路の旅……………	一二六
二七、俊基朝臣の東下り……………	一二三
二八、明治天皇の御製……………	一四〇

卷七目次終

日本女學讀本卷七

一、明治天皇の御聖徳

池邊義象

草莽の民

我が明治天皇の叡聖仁慈にわたらせ給ふ御徳は、九重雲深くして、余輩草莽の民の窺ひ知る所にあらざれども、たゞ年來心にとめて傳へ承れる一端を、左に記し奉らん。

申すも畏き事ながら、余輩が漏れ聞く所によれば、明治二十一年、憲法草案の樞密院の會議に附せらるゝや、凡そ四箇月の久しきに亘りぬ。此の間、毎日五時間ばかりの議事なりしに、上には、午前十時に必ず臨御ありて、玉座につかされたま

臨御

叙慮

ひ、議官等の參集おそき時などは、まゝ侍從を以て御催促あらせられし事もありき。かゝれば議事に深く叡慮をとゞめさせ給ふことは申すまでもなし。會議の日に御闕席仰せ出されしは、僅に陸軍戸山學校へ行幸の日、一日のみなりきと承る。されば、その時は樞密院にても議會を見合せられたりとぞ。

賜暇

七月中旬にいたり、暑中休暇の程なれば、官吏は賜暇の惠に浴して、避暑旅行など思ひくゞに企つる時に、上には炎熱焼くが如きをも厭はせられず、午後三時すぎまで續いて會議の席に臨御あらせられたりとぞ。又、議院法の議事の折か

とよ、昭^ニ宮薨去の事、侍從より上奏ありければ、議長は、議事を

軋轢

供御

結了

宸憂

中止すべしや。」と伺ひ奉られしに、上には「かまひなく議事をつゞけよ。」と仰せいだされたり。されば、議長は議事の一段済みて後、始めて散會を宣言したりといふ。
いともかしこく覺ゆるは、政黨の軋轢甚しき時の如きは、何となく天機勝れさせ給はず、常の供御も減ぜらるゝことありし由に承る。二十四年の春の第一期議會において、豫算會議の議事いまだ結了に至らざりし時は、日々議院の狀況の報告を聞しめされ、深更に至りても、侍從より電話の報告を大奥に上奏し奉りたりといふ。憲法政體の初年なりしかば、其の結果いかゞあらんと、深く宸憂あらせられし御事と察し奉らる。

感泣

豫算の議事穩かに結了を告げたりとの報告を聞しめさるゝや、天機殊にうるはしくて、岩倉並に諸臣等の憲法政體に憂慮したりしものども、今は地下にて安堵しつらん。速にその墓所に使を遣して知らせよ。と仰せ出されきとぞ。此の御詞を承る者誰か感泣せざらんや。

拜謁

なほうけたまはる所によれば、上には、日々表御殿に出御あらせられて、諸大臣に拜謁仰せ付けられ、又政務上の文書御閱覽あらせられ、さて、午後三時前後暑中は十二時までにはじめて大奥に入御あらせらるといふ。入御の後とても、緊急の事あれば、上奏をきこしめし、夜に入りても文書に御親署あらせらるゝ事ありきとぞ。

緊急

御親署

御下問

允裁

乾々

宵衣旰食

述懷

御閱覽の時は、一々仔細に御推究あらせられ、もし御疑點ある時には、それ〴〵の筋へ御下問あらせられ、しかる後に御允裁あらせられたる由なり。陸海軍の上奏に至りては、大元帥の天職をつくさせ給ふとにや、最も仔細に御閱覽あらせられたるよしに承りぬ。かくまで政事上に、終日乾々の聖德あらせらるれども、亦立憲政體の大義を重んぜさせ給ひ、大かた内閣各大臣の言を容れさせ給ひきといふ。

かくばかり、萬機の政に宵衣旰食の御勞をみづからせさせ給へども、御父帝の御遺詔を守らせ給ひて、代々に傳へ給へる敷島の道には、常に御心をよせさせ給ひ、御製は數萬首の多きに及び給へりと承る。ある時、述懷の御製とて、

いにしへの文見るたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと

又「月不擇所」といふ御題にて

萩の戸の花にやどれる月かげは

賤が垣根もへだてざるらむ

とあそばされき。一視同仁の御心、いとかしこしとも畏ききはみになん。

一視同仁

〇二、昭憲皇太后十二徳の御詠

節、制

花の春、紅葉の秋の杯も、

ほどく／＼にこそくま／＼ほしけれ。

清潔

しろたへの衣の塵は掃へども、

憂きはこゝろの曇なりけり。

勤勞

磨かずば玉の光は出でざらむ、

人の心もかくこそあるらし。

沈黙

過ぎたるは及ばざりけり、假初の

ことばもあだに散らさゞらなむ。

確志

人心かゝらましかば、白玉の

眞玉は火にも焼かれざりけり。

誠 實

とりぐにつくるかざしの花もあれど、

にほふ心のうるはしきかな。

溫 和

みだるべきをりをばおきて花櫻、

まづ笑むほどを習ひてしかな。

謙 遜

高山の影をうつして行く水の、

低きにつくを心ともがな。

順 序

奥深き道も極めむ、物事の

本末をだに違へざりせば。

節 儉

吳竹のほどよき節をたがへずば、

末葉の露も亂れざらまし。

寧 靜

いかさまに身は碎くとも、むら肝の

心はゆたにあるべかりけり。

公 義

國民をすくはむ道も、近きより

おし及さむ、遠きさかひに。

三、月雪花

芳賀 矢一

春は花見、夏はすゞみ、秋は月見、冬は雪見、夏はいはゆる三つの眺に關係はないが、月夜の涼みは又格別である。

春の花見は、昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂の時期である。芋栗を捧げて月を祭る風俗、田園の收穫を終へて勞苦を忘れる快樂は、一般國民的の雅興である。『お月さまいくつ』の俚謠、雪よ、ふれ〜の童謠、月雪花の風流は、赤子の時から教育せられて、われらの頭に沁み込むのである。

雅興
俚謠
童謠

逕庭

それ故、月雪花を見て美を感じるといふは、既に多少歴史的因縁の添つて居ることである。わが國の櫻花は、唐人も高麗人も、うつくしといふに違ひないが、わが國民の感ずる所とは大きな逕庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をも有つて居らぬ。われらは、子供の時から月雪花で教育せられて、大きくなつた。月雪花を玩ぶといふ詩的教育を受けたものである。

塵世
隱遁者
皚々
汲々
營々

風流の眞義は、塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて、活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くとも、皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對しては、これを眺めて居る間は、名譽に汲々し利慾に營々たる

悠揚

社會を忘れてしまふ。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にし、人を悠揚にするものである。

玲瓏透徹

光風霽月

月雪花は、われらを神聖にし、われらを高尚ならしむる勢力がある。故にわれらは月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、玲瓏透徹、一點の汚なきものとして、光風霽月など、いつて、君子人の心に比べられ、月を蔽ふ雲は、その光明を掩ふ者として、邪佞の小人になぞらへられるのである。雪は、その皎潔で、一點の塵がなく、凜烈な所を見て、潔白な精神や節操の高きことを聯想する。花は、その爛漫たる美しさの、忽ち風に散りゆくを惜しんで、節義の士が

皎潔

爛漫

潔く身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花や、靈あつて皆これらの徳を備へて居るが如く感ずるのである。古人が斯く感じ來つたその儘を、われらは承け繼いで、われらも斯く感ずるのである。

髣髴

月雪花の眺を恣にするこの出来ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加せられた傳説の無い國民も、亦人生の興味は少い。われらは月雪花に對して、古來の文學を味ひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。月雪花を通して、わが國民の歴史は、髣髴として眼前に浮ぶのである。

今や、わが國は世界の日本となつた。われらの足跡は世界

の上に印せられねばならぬ。猿澤の池、鳩の海の上に照る月ばかりではなく、太平洋、印度洋の月を見、埃及の金字塔、支那の萬里の長城の月を眺めることもある。さては、アルプの高峯の雪に攀ぢることも、西比利亞の吹雪にさまよふこともある。滿洲征戰の迹には、日本の櫻も移し植ゑられるし、紐育の公園には、御賜の櫻もうわるといふこの現代には、多くの新名所が起らねばならぬ。後人をして俯仰感慨措く能はざらしめる多くの文學上の佳話は、必ず新時代の人によつて遺されるであらうと思ふ。(月雪花)

俯仰感慨

在米ノ日
本人ニ賜
ハツクナ
ヨイカキ
國又ハ紐
育市ヘ
贈りし
ノヤリ
賜トイフ

四 熊野

熊野ハ遠東南洋ニ在リ

長者

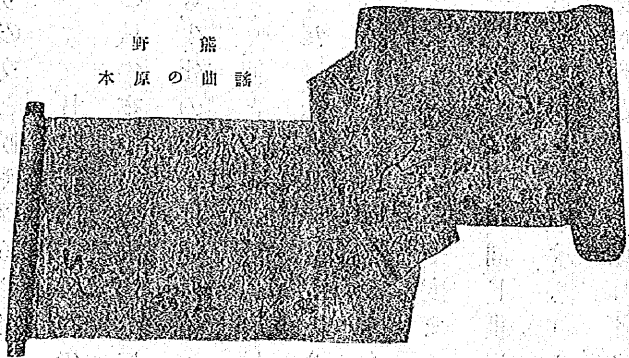
「是は平の宗盛なり。偕も遠江國池田の宿の長をば熊野と申候。久しく都に留め置き候が、老母のいたはりとして度々暇を乞ひ候へども、此の春ばかりの花見の友と思ひとゞめ置きて候。如何に誰かある。」
「御前に候。」
「熊野來りてあらば此方へ申候へ。」
「畏つて候。」
「夢の間をしき春なれや、咲くころ花を尋ねん。」
「是は遠江國池田の宿、長者の御内に仕へ申す嬢と申す女にて候。」
「扱も熊野久しく都に御入り候が、此の程老母の御いたはりとして度々人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に、此の度嬢が御迎に上り候。」
「此の程の旅の衣の日もそひて、幾夕暮の宿ならん。夢も數そふ假枕明し暮して程もなく、都に早く着きにけり。」

笑止

「急ぎ候程に是は早都に着きて候。是なる御内が熊野の御入り候所にて有りげに候。まづ／＼案内を申さばやと思ひ候。如何に案内申候。池田の宿より權が参りて候。夫々御申候へ。
シテサシ草木は雨露のめぐみ養ひえては花の父母たり。況や人間においてをや。あら御心元なや。なにとか御入り候らん。
シテ池田の宿より權が参りて候。シテなに權と申すか。あら珍しや。扱御いたはりは何と御入り有るぞ。シテ以ての外に御入り候。是に御文の候。御覽候へ。シテあら嬉しや。まづ／＼御文を見うずるにて候。あら笑止や。此の御文のやうも頼み少う見えて候。シテ左様に御入り候。シテ此の上は權をもつれて参り。又此の文をも御目に懸けて御暇を申さうずるにて

見参
びん
なう

熊野
諸曲の
原野



有るぞ。此方へ來り候へ。誰か渡り候。トモ誰にて渡り候ぞ。や。熊野の御参りにて候。シテ妾が参りたる由御申候へ。トモ心得申候。いかに申上候。熊野の御参りにて候。シテ此方へ來れと申候へ。トモ畏つて候。此方へ御参り候へ。シテ如何に申上候。老母のいたはり以ての外に候とて、此の度は權に文を上せて候。びんなう候へども、そと見参にいれ候べし。シテなにと故郷よ

甘泉殿
驪山宮

生死の掟

さらぬ別

りの文と候や。見るまでもなし。それにてたからかに讀み候へ。^{シテ}「甘泉殿の春の夜の夢、心をくだくはしとなり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし如月のころ、申しゝごとく、何とやらん此の春は、年ふり増る朽木櫻今年ばかり花をだに、詠めもやせじと心弱き、老いの鶯逢ふ事も涙にむせぶばかりなり。唯然るべくはよきやうに申し、しばしの御暇をたまはりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだにそひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし。唯返すゝも命の内に、今一度見參らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別のありといへば、いよく

玉の緒

見まくほしき君かなと、古ことまでも思ひ出の涙ながら書き留む。そも此の歌と申すは在原の業平の、其の身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ老母のよめる歌なり。扱こそ業平もさらぬ別のなくもがな、千世もといのる子のためと、詠みし事こそ哀なれ。^{シテ}「今はかやうに候へば、御暇をたまはり東に下り候べし。^{ソキ詞}老母のいたはりはさる事なれども、さりながら、この春ばかりの花見の友、いかでか見捨て給ふべき。^{シテ}「御言葉をかへせば恐なれども、花は春あらば今に限るべからず。是はあだなる玉の緒の長き別となりやせん。唯御暇をたまはり候へ。^{ソキ詞}「いやく左様に心よわき身に任せてはかなふまじ。いかにも心を慰めの花見の車同車にて、と

足弱車

もに心をなぐさまんと、牛飼車よせよとて、是も思ひの家のうち、はや御出とすゝむれど、心はさきに行きかぬる、足弱車の力なき花見なりけり。

名におふ

シテ「名も清き水のまに」とめくれば、地「河は音羽の山櫻、シテ東路とても東山、せめて其方のなつかしや。地「春前に雨あつて花の開く事早し、秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山あつて山つきず、路中に道多うして道極りなし。シテ「山青く山白くして雲來去す。人樂しみ人愁ふ。これ皆世上の有様なり。誰かいひし春の色、げに長閑なる東山。四條、五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、いろめく花衣、袖をつらねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名におふ春の

北斗

けしきかな。地「河原面を過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む。シテ「観音も同座あり、聞提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや。地「げにや守の末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ。六道の辻とかや。シテ「げに恐ろしや此の道は、冥途に通ふなるものを、心ほそ鳥部山、地「煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横はる。シテ「北斗の星の曇なき、地「御法の花も開くなる、シテ「經書堂はこれかとよ。地「その垂乳根を尋ねなる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ「春のひまゆく駒の道、地「はや程もなくこれぞこの、シテ「車宿り、地「馬留め、こゝより花車、おりゐの衣、播磨湯、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。ワキ「詞「い

かに誰かある。^{トモ}御前に候。^{ッキ}熊野はいづくに有るぞ。^ト
「未だ御堂に御座候。^{ッキ}何とて遅なはりたるぞ。急いで此
方へと申候へ。^{トモ}畏つて候。いかに慥に申候。早花の本の御
酒宴の始りて候。急いで御参りあれとの御事にて候。其の由
仰せられ候へ。^{ッレ}心得申候。如何に申候。早花の本の御酒宴
の始りて候。急いで御参りあれとの御事にて候。^{ッテ}何とは
や御酒宴の始りたると申すか。^{ッレ}さん候。^{ッテ}さらば参ら
うずるにて候。なうく皆々近う御参り候へ。あら面白の花
や候。今を盛りと見えて候に、なにとて御當座などをも遊ば
され候はぬぞ。げにや思中にあれば色外に顯る。よしやよし
なき世のならひ、歎きてもまた餘りあり。^{シテサシ}花前に蝶舞

御當座

諸行無常
生者必滅

ふ紛々たる雪、^地柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つ
て香の來ること疾し。鐘は寒雲を隔て、聲の至ること遅し。
清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無事の聲やらん。
地主權現の花の色、娑羅雙樹のことわりなり。生者必滅の世
のならひ、げにためしある粧ひ、佛も元は捨てし世のなかば
は雲に上見えぬ、鶯のお山の名を残す、寺は桂の橋柱立ち出
で、峯の雲、花やあらぬはつ櫻の、祇園林下河原。^{ッテ}南をは
るかに眺むれば、大悲擁護の薄霧、熊野權現のうつります、御
名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋又花
の春は清水の、唯たのめ頼もしき、春もちの、花盛り。^{ッテ}山
の名の、音羽あらしの花の雪、^地深き情を人やしる。^{シテ詞}妾御

酌にまゐり候べし。ソキいかに熊野ひとさし舞ひ候へ。地深
き情を人や知る。シテ調「なうく」俄に村雨のして花の散り候
はいかに。ソキげに村雨のふり來て花を散し候よ。シテ「あら
心なの村雨やな。春雨の^地降るはなみだか櫻花散るを惜し
まぬ人やある。ソキ調「よしありげなることばの種取りあげみ
れば、いかにせん都の春も惜しけれど、シテなれしあづまの
花や散るらん。ソキ調「げに道理なり哀なり。早々暇とらするぞ。
東に下り候へ。シテ何御いとまと候や。ソキ調「中々のこと、とく
く下り給ふべし。シテ「あら嬉しやたふとやな。是觀音の御
利生なり。是迄なりやうれしやな。かくて都に御供せば、また
もや御意のかはるべき。たゞ此のまゝに御いとまと、ゆふつ
鳥ゆふつけの

けの鳥がなくあづまぢさして行く道の、やがてやすらふ逢
坂の關の戸ざしも心して、明け行く跡の山見えて花を見す
つる雁金の、それは越路我はまたあづまに歸る名殘かな。

五、櫻諍ひ

「アドこれはこのあたりの者でござる。此の頃は、いづ方も花
の盛りぢやと申すほどに、花見に参りたる存ずれども、ひ
まがなさに、参ることもえいたさぬ。最早ひまになつて御
座るほどに、今日は花見に参らうと存ずる。まづ太郎冠者
を喚び出し、申しつけう。やい、太郎冠者あるか。

シテ
太郎冠者「はあ。

アド「居たか。」

シテ「お前に居ります。」

アド「汝を喚び出すこと、別のことではない。このごろは方々の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。最早ひまになつたほどに、花見に出でうと思ふが、何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛りぢやと申すほどに、櫻を御覽ぜられうとあらば、尤もでござるが、珍しからぬ花を御覽ぜられて、何にさせらるゝ。」

おのれ

アド「いや、おのれ、汝は何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。」

頼うだ人

シテ「これは、頼うだ人とも覺えぬことを仰せらるゝ。左様に

仰せられたらば、人中で恥をかくせられう。身どもは苦しうござらぬが。」

アド「して、おのれが其の様にいふは、仔細があるか。」

シテ「なか／＼、仔細こそござれ。花が見させられたくば、私はなを見させられ、他所へござるまでもござらぬ。」

言語道斷

アド「いや、汝は言語道斷のことをいひ居る。汝が面なは、鼻と

いふ。花といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも、櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。」

アド「なか／＼、でもないことをいひ居る。其の歌を詠うで聞かせい。」

シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。」

アド「急いで詠め。」

シテ「心得ました。櫻ちる木の下陰はさむからで、空に知られぬ雪を降りける。これは何と。」

アド「此方にも、花といふ歌がある。」

シテ「さらば、詠うで聞かせられい。」

アド「行きくれて、この下陰を宿とせば、花や今宵の主人ならまし。」

シテ「此の方にも、まだござる。山櫻霞の間よりほのかにも、見えし人こそ戀しかりけれ。」

アド「それなら、此方にもある。花の色はうつりにけりないた

づらに、わが身よにふるながめせしまに。」

シテ「それならば、此方には諸にござる。」

アド「唄へ。聞かう。」

シテ「櫻かざしの袖ふれて。」

アド「一段の謠唄ふ。いたしやうがござる。やい、太郎冠者。」

うたひ「花見ぐるま、くるゝより、月の花よ、またうよく。」

シテ「はあ。これでつまりました。」

アド「總別、何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、某と競り合ひ居る。彼方へうせい。」

シテ「はあ。」

アド「えい。」

むざとした
こと

「ハッテ」はあ。

(續狂言記)

六、笑ひぐさ

三宅花圃

慟哭

笑ふは快樂の心をしめし、泣くは悲哀の情をあらはす。泣くには、慟哭したる、いかばかり悲しからんとあはれなり。笑ふには、高笑したる、いかばかり楽しき事あらんと、引き入れられてほゝゑまる。

嘲笑

されど、嘲笑は泣かるゝよりも、怨まるゝよりも、憤らるゝよりも無氣味なり。

澀面

苦り切つて澀面つくりたるは、何ともたとへかたなく、その人の心の不安思はれて、安き心地もせず。シーザーがカッ

苦笑

シヤスの笑ふ事なく澀面作れるを無氣味に思ひしも、これなるべし。箸のこけたるにも笑ふといふ年頃に、笑はぬ少女もあるべけれども、これは皆おのが心の置き方にもよれり。心を明るき方におかば花のちる、木の葉のみだるゝ、いかでかおもしろく、可笑しからざらん。都會の人はよく笑へども、いたづらに聲のみ高く、心よりは笑はぬやうなり。

寒國の者は笑へども、聲をしのびて笑ひ方陽氣ならず、外見には笑はぬやうに見ゆるが多し。暖國の者はいかにも心地よく笑ふ。その人も、聞く耳もおもしろし。笑ふと泣くは紙一枚の隔もなきほどなり。今泣いた鳥がもう笑うた。といふ子供の心理は、大人もかはらず。苦笑といふがこの間一髪の

輕浮

間に入るだけ、大人は複雑になれるのみなるべし。實に腹立ち易き人、輕浮なる人は、小兒とかはらず。今泣き騒ぎしかと思へば、ケロリとして居るもあり。これらはまことに心の海に立ち騒ぐ小波の底ふかゝらねば、然る故もあらん。

直情

吹き出し笑ひは直情の流露、罪淺しともいはゝいはん。ふつと吹き出して袖に覆ひ、唇にくひとめて、片手を振り、色目にそれと人にしめしたるは罪深し。

放笑

あはゝの放笑も、からゝの高笑もあしからじ。堪へても堪へきれずして、抱腹絶倒といふほどの可笑しさも、人によれば同じ事を聞きて、さのみ感ぜぬ人もあり。性質にもより、その時の心の置き所にもよるべし。かの豪傑笑といふあは

抱腹絶倒

文武の道

とからゝを思ふに、忘れがたき笑なり。

刳る

おばしま

明治天皇は文武の道に明けくおはしましゝのみか、手藝のわざにも長ぜさせ給ひて、大御手づから御細工物などせさせ給ひしよし、殊には瓢を刳りて煙草入などに物せさせ給ひしとか。或日の朝、おばしま近くに立ちおはして、大庭をながめさせ給ふに、數日雨ふりつゞきし後とて、かの御手細工の料にとて軒高く干しおかせられつる瓢の朽ちてぐさと御階の下に落ちたりつるを、それと御覽ぜさせて、いつになく御高笑遊ばしつること、かしこくもめづらしき例と談り聞けし人あり。この御笑ひさまの、いかにも優にせまらず、無邪氣にして、上の御笑とはかゝるをやいふべからんとぞ

思ひし。

西郷隆盛の鹿兒島にて、かの百姓の中に立ちまじらひな
どして獵りくらしゝほど、櫻島大根を馬の背に積みて家に
歸り來しに、と見れば大根は皆繩をぬけて、道すがら落ち散
り、一本も残らざりしを、呵々大笑してしばし打ち目守り居
たりきと聞き傳へしが、いかにもおもしろくおぼゆ。

呵々大笑

さて笑には負け惜しみに笑ふが多し、物紛らしに笑ふも
多し、口で笑うて胸では泣く。といふ魂膽もあるべきか、かゝ
る笑はいづれもよしなし。笑ふ事の最上々なるは、にこゝ
なるべし。笑ふ門には福きたる。といふもこれなり。にこゝ
は一時的のものならず。多年の修養になれるもあり、先天的

魂膽

先天的

の性を得たるもあり。にこゝは慈悲・感謝・快樂・幸福の目標
なり。にこゝしたる人の前には、鬼も角を伏せ、盜も心を翻
し、禍神も踵をかへし、福は擧つて招かざるによるべくや。米
國の紐育に笑醫者といふがあり、名をバルチックといふ。何
時も笑ましげにして患者に接するに、あまり藥を要せずし
て、快癒する事すみやかなりきとぞ。おのづから同化して、心
爽快におぼゆればなるべし。

また同じ米國の富豪にワナメーカーといふは、大なるデ
パートメントストアの主人なり。我が國の基督教青年會へ
も、莫大の寄附などせし人とぞ。寫眞などにて見れば、さのみ
笑顔とも見えねども、この主人にグードモーニングと聲か

莫大

けらるれば、誰も勢づきて、一週間は事務の捗るといふ事を聞きぬ。かゝる笑こそにくの上乗なれ。

濫面にて得たる利益はなかるべし。我に對する者を快く思はすれば、直に我も亦快くなり得べければ、人に對する時は、鏡にむかへる心地にせよと古人もいひおかれしとよ。

舅姑に對する、父母に對する、夫に對する、子に對する、親族朋友、出入の人々、使用する僕婢など、いつも思へる事をはゝからずいひ得べく、こゝとして腹藏なく馴れ睦まゐるよし。澀面つくりて一時を避くるは、卑怯の徒なるべし。いつも笑顔してあらんは、品下れりとおもひたがへて、揚れる氣色に首をさし出で、襟をぬき、取りすましたるは、淺はかなる

腹藏
卑怯

おのれを表すに似たり。にこゝとして居ながらも、なほ冒しがたき方のあらんもよし。またにこゝとしたる溫顔に對しては、誰もゝ心の善に立ちかへる心地して、馴れしたしまんほどなるは、さらにゝよし。(その日ゝ)

七、出産を祝ふ文

時は取りこの市を熊の足なぞよりいそぐ
 さうには嫁をよみ分岐路より男子の生の一
 ちをく
 松乃代のやうに祝ひよるあやむかひ
 此處君を重なる時 此處に受納せられたる

五月五日

同 返事

可達書言はれ下され難きも厚きおと成哉なり何とあれ
のりれ湊ふずやと云幸ふ母子あり健康あり何れ故障
と、いなきも悔ひなりと云あやうしうふづきその
内改めいひも難ひと云と云をあられのと、うー

五月八日

八、家庭

加藤 咄 堂

家庭は女性の天地なり。その中愛を以て満さる。愛のある
處九尺二間の裏長屋にも、百花爛漫たる春を見るべく、愛の

金殿玉樓

連鎖

權化

渾身

なき處、金殿玉樓と雖も、秋風落寞たる感なき能はざらん。愛
は家庭の連鎖なり。夫婦、親子、兄弟、主従、皆愛によつて結ばる。
家庭の主人たるべき女性は、まことに愛の權化たらざるべ
からず。よし舅姑のために苦しめられ、義姉、義妹のために嫉
視せらるゝことありとも、それは己が愛の力の足らざるもの
なることを自覺して、怨むことなく、怒ることなく、これに耐
へ、これに忍び、報ゆるに渾身の愛を以てせば、何人かこれに
感ぜざらん。見よ頑強なる堅氷も、そよ吹く春風には終に解
け去るにはあらずや。愛はすべての力の中の最も強き力な
り。

人はいふ、日本の家庭は父母兄弟同居するがゆゑに、風波

衝突
隣保

常に絶えず。と。これその一を知りて、未だその二を知らざるものゝみ。薔薇の刺あるを見て、その花を見ざるものあらば、人誰か其の愚を笑はざらん。蜂の螫あるを知りて、その蜜あるを知らざるものあらば、人誰かその痴を笑はざらん。舅姑同棲は、或は新舊思想の衝突によりて、感情意見の調和せざることもあらん。然れども、家事の整理に於て、隣保の交際に於て、子女の鞠育に於て、經驗あり熟練ある父母の傍にあるならば、その新夫妻の上に利益を與ふることいかばかりぞ。かの舅姑と新婦との相協はざるが如きは、家庭を組織する人々の人格にあり、組織の罪に非ざるなり。況や、妻たり婦たるもの、渾身の愛情を盡して、夫を助け舅姑に仕ふるあらば、

婉順

感應の力は、遂に頑固の人をも化して婉順の人たらしむべきをや。

辣腕

偉人の大業を成すも、良妻の内助の功に由ること多し。歐洲の外交界に辣腕を振ひたる鐵血宰相をして、「予が妻に負ふ所の如何に多きかは、これを口にする能はず。」

淑徳

と云はしめたるビスマーク夫人の内助の功は、毫も外交に現れずして、而も能く歐洲の天地を動かせり。英のグラッドストンは近世の政治家なり。彼をして英國の富を以て買ひ得ざる心の平和を得しめしものは、其の夫人カザリンの淑徳なり。露のトルストイは夫人の淨寫によつて一代の著述

貢獻

を印刷に附し、失明の經濟學者フォーセツトは其の夫人の助によつて斯學に貢獻せり。ヂスレリーが大演説を試みんとして議會に急ぐ途次、同車せる夫人は馬車の扉の爲に指を挫かれしかども、其の事の夫の心を痛めんことを恐れて、苦痛を忍びて一言も發せざりきといふが如きは、實に此人の妻たる者の記憶すべき佳話にあらずや。妻たる道は此の如き獻身的愛情にあり。かの徒に巧言令色、夫の歡心を得ることをのみ謀りて、其の補助者たるべき實を忘るゝが如きは、眞に人の妻たるものゝ道にあらず。從順は女性の美德なり。然れども、屈從は美德にあらず。女子訓に曰く、
「女子は内に在りては父母に従ひ、嫁しては舅姑夫に従ふ

屈從

巧言令色
歡心

佳話

異見

かしまし
ひがごと

女性

品性
感化

と申すは、事新しく申すにも及ばず候へども、いかに夫の仰に背かざるが道にて候とて、夫の公の御法度に背き、惡事などいたし候を諫めざらんは、大なる誤に御座候。いかにも詞あらだゝぬやうに、みづからの心を鎮めて、しめやかに理を盡して異見いたし候が、妻たるものゝ道にて候。それも聲高にかしましく夫を罵り辱しむるはひがごとにて候。所詮は、自らの身正しければ、夫も妻の申す事を用ひ、家内親類中も治り調ひ申すものにて候。
これ今もなほ女性の教訓とすべき言たり。

女性の身には、妻たる外、母たる任務あり。母の心身は其の生子に遺傳し、母の品性は其の兒童を感化す。世間、何人か母

陶冶

の懷に抱かれざるものあらん。これを育成し、これを陶冶せんことは、一に母たる女性の責に屬す。内訓に子女教育の道を説いて曰く、

廉遜

「これを教ふる者は、導くに道義を以てし、養ふに廉遜を以てし、率ゐるに勤儉を以てし、本づくに慈愛を以てし、臨むに嚴格を以てして、其の身を立て、其の徳を成す。慈愛も姑息に至らず、嚴格も恩を傷ふに至らず。恩を傷へば則ち離れ、姑息なれば則ち縦にして教行はれず。詩に曰く、則ち色し、戟ち笑ひ怒るにあらず、これ教ふ。」

嚴格

姑息

子女の目に映ずるものは、其の父母なり。而して、その最も近接するは母なり。されば、母は實に自ら正しうして他に及

嫡母

姦毒

さゝるべからず。婦徳の闕如は、啻に家庭に禍するのみならず、實に社會を蠱毒するものなり。家庭の王國に主たる女性の責も亦大なるかな。(女性觀に據る)

統御者

權能

九 親 族

添 田 壽 一

親族に關して二種の主義あり。一は家長又は戸主といふものを置き、これをして一家の代表者、家族の統御者たらしむるものにして、これを家族主義と稱す。一は家族が各個に同一の權能を有するものにして、これを個人主義といふを得べし。此の兩主義の利害は容易に判定すべからずと雖も、家族主義は一家の維持統一に便にして、個人主義は各人の

發達に必要なり。故に、此の兩者を併用せば、以て害を避け利を全くすることを得べきなり。我が民法の採用せる所も亦茲に在り。

民法上に謂はゆる家族は、自ら一定の限度あり、即ち、戸主の親族にして其の家に在るもの、及び其の配偶者に限りて、これを家族といふなり。而して又謂はゆる親族とは、血族姻族、及び配偶者にして、家に在ると否とを問はず、左の範圍に屬するものをいふなり。

- 一、六親等内の血族。
- 二、配偶者。
- 三、三親等内の姻族。

配偶者

直系

傍系

世數

庶子

血族中、父母祖父母子孫の如きは直系に屬し、兄弟、伯叔父母等は傍系に屬す。姻族とは結婚に由りて生ずるものにして、夫と妻の血族と、若しくは、妻と夫の血族とは共に姻族なり。

親等は自身、又は妻を起點とし、世數を算じてこれを定むと雖も、傍系に在りては、其の一人、又は其の配偶者より同始祖に遡り、其の始祖より他の一人に下る迄の世數に依る。養子と、養親、及び其の血族との間に於ては、養子縁組の日より、血族間に於けると同一の親族關係を生じ、繼父母と繼子と、又、嫡母と庶子との間に於ては、親子間に於けると同一の親族關係を生ず。然れども、これらは姻族關係と共に、離婚、又は

離縁に由りて消滅することあるを免れず。

家族たるものは、戸主の意に反して居所を定むるを得ざるのみならず、婚姻又は養子縁組を爲すには、戸主の同意を得ざるべからず。是、戸主權を認定する自然の結果なり。これと同時に、戸主は家族を扶養教育すべき義務を負ふ。然れども、家族が得たる財産を家族自己の名に於て特有すること、を許したるが如きは、個人主義をも認定せる結果なり。而して、戸主權は、死亡又は隱居の外、これを失ふことなし。彼の隱居の制たる、動もすれば債權者の利害に關係し、其の甚しきに至りては、個人の發達及び一國の富強と相容れざることをあるを以て、戸主が疾病其の他已むを得ざる事由ありて裁

認定

特有

個人主義

債權者

單純承認

判所の許可を得たる場合の外は、戸主の年齢滿六十年以上にして、完全なる能力を有する家督相續人が相續の單純承認を爲すに非ざれば、隱居は濫に許可せられざるなり。

隆替

任意の承諾

凡そ婚姻は各人に取りて無二の大事なるのみならず、生涯の苦樂、子孫の盛衰、一家の隆替も、これに由りて分岐し、其の宜しきを得ると否とは、公私の利益に重大の關係あり。就中早婚の弊は大に恐るべきものあり。故に、男は滿十七年、女は滿十五年に至らざれば、婚姻を爲すを得ざらしめ、且父母又は後見人の同意に加ふるに、結婚せんとする男女の雙方の任意の承諾を要することゝせり。

婚姻既に成立するときは、妻は夫の家に入り、入夫及び婿

經營

養子は妻の家に入り、妻は夫と同居し、夫婦互に扶養すべき義務を負ふ。是婚姻の主眼は一家を經營し苦樂を共にするに在るより生ずる自然の結果なり。

契約

婚姻届出前に、夫婦は其の所有財産に就きて別段の契約を爲すことを得れども、契約なきときは、夫は妻の財産を管理するを原則とし、日常の家事に就きては、妻をば夫の代理人と看做すものとす。これらは全く一家經營上の必要に基づけるものなり。

婚姻は永久の契合にして、夫婦の關係は殆ど神聖なり。故に苟も一度夫婦となれる以上は、配偶者の死亡せる場合の外、濫に此の關係を切斷すべきに非ず。但し萬止むを得ざる

讓歩

百万

場合に限り、夫婦の協議を以て離婚を爲すことを得るものとす。されど、事のこゝに至るは不幸の最も甚しきものなるが故に、尙耐忍を主とし、忠告、讓歩、又は其の他の手段に由り、百万和合の方策を講ずべきなり。

一掃

本邦に於ける離婚の件数は、殆ど婚姻の五分の一に當り、他邦に比して其の數の著しく夥多なるは、結婚前の注意の足らざると、婚姻を重んぜざるとに由る。この弊は斷然一掃し去らざるべからず。

子の出生に由りて親子の關係を生ず。蓋し父母は力を其の子の育成に致し、これをして完全なる人とならしめ、他日獨立の生計を爲すに足るべき素養を與ふべき義務あるが

懲戒

親權

故に、又子を監護・教育・懲戒し、且其の財産を監理する權を有す。此の權を稱して親權と云ふ。子は其の家に在る父の親權に服せざるべからず。若し、その父これを行ふ能はざるときは、母の親權に従はざるべからず。但し、子既に成年に達して、獨立の生計を立つる場合には例外なり。又、未成年の子は、其の居所を定むるに、父母の指定を受け、兵役を志願し、職業を營むに、父母の許可を受くるを要す。是皆子をして不測の危害に陥らざらしめんが爲なるのみならず、父母をして安んじて其の義務を盡さしめんが爲の規定なり。(法制教科書)

不測

一〇 保險の話

粟津 清亮

警戒

京都の知恩院に、大きな釣鐘があります。其の釣鐘の下を女が通ると、蛇になると云ふ。婦人方が其處に大勢居て、皆そんな馬鹿な事はないと申しますが、そんなら通つて御覽と云ふと誰も通らない。蛇にならぬと信じて、其處が人間の心理状態で、何となく氣味悪く、萬々一を氣遣ふ恐怖の念を持つ結果であります。吾人が萬一の危険に對して警戒すると云ふ思想が、保險思想であります。又、其の思想の發現したのが、保險事業であります。

救済

保險とは、文字上から云へば、危険を保證すると云ふ行爲であります。此の行爲は、危険を恐れて居る多くの同志を集め、互に他人の不幸を救済するので、豫て各適當な金額、即ち

醱出

保險料を醱出して共同の財産を作り、同志中に危険に遭遇して損を受けた者のあつた時、其の財産で之を償ふと云ふ方法であります。即ち保險は不幸に對する相互救済の法であつて、その機關は即ち保險會社であります。今から千年も前、保險の初めて出來た頃は、會社などいふ制度はなく、組合組織のギルドと云ふのが歐羅巴にありました。このギルドは、原始的のものでありますが、今日でも行はれて居ります。例へば、一の工場、云はゞ鐘淵紡績會社と云ふ工場に従事する職工が、一の組合を作り、鐘紡救済組合と名をつけ、其の加入職工の給料中より、毎月若干の金を醱出して共同の財團を作り、さうして、加入職工の萬一の場合には、組合の財團が

財團

例外

株式會社

ら相當の金を出して之を救済するのが、即ちこれです。然し、この組合組織のものは、今は例外のものとして、保險の内へは入れません。一般の機關としては、民間事業として存在する會社組織のものであります。保險會社には、相互保險會社と、株式保險會社との二つがあります。株式會社は、株主が會社を造つて、保險を營業として居るものであるが、相互會社には株主といふものは無く、被保險者ばかりが集つて、會社を造つて居る。即ち、會社を組織する者は、株主でなく、保險契約者であると云ふ、一種の自治的保險であります。保險の種類は澤山あるが、海上保險、生命保險、火災保險、運送保險等が、古くから發達して居ります。近世に至つて、社會

問題特に勞働問題など、最も密接な關係のある保險が出來ました。これは下級社會の勞働者の保護救濟の一法として、國家的政策の上から勞働者を保險團體に入れる爲に設けられたのであります。其の數多い種類の中、疾病保險、癱疾保險、傷害保險、失業保險などが、重なものであります。以上の外に、西洋で行はれる面白いものには、硝子の破損に對する硝子保險、水道の鐵管の破損に對する水道保險、其の他、盜難保險、身元引受保險、ボイラー保險など、中々面白い保險が澤山あります。

一一 勸農の詞

小林 一茶

風流を樂しむ花園ならで、後の皇前の田の作物に志し、自ら鋤を取つて耕し、先祖の賜と命の親とに懇を盡す。吉野の櫻更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。

朝夕心を留めて打ち向ふ菜種の花は、井手の山吹より好



讀筆茶一林小

ましく、麥の穂の色は牡丹芍薬より腹應へあるかと覺ゆ。朝顔より夕顔こそよけれ。萩桔梗よりも芋牛蒡に味あり。總べて花紅葉より栗柿は寶の植木なり。稻の穂竝の賑しきは菊の花より腹滿つる心地して、粟穂に馴るゝ鶉野邊に鳴く蟲

調法

の音聞くが面白く、遠き名所・舊跡より、近き田圃の見廻りが飽かず。松島・鹽竈の美景より、飯釜の下肝要なり。上作の名劍より、鎌・鍬は調法なり。

書畫の掛物より、掛けて見る作物の肥を油斷せず。投入・立花の工より、茄子・大角豆の正風なるが見所多く、茶の湯・蹴鞠の遊より、澀茶を飲んで昔語するこそをかしけれ。玉の臺より、茅葺の家居が心易く、高きに居らねば落つるあぶなげなく、迷はねば悟らず、念佛のかはりに業を怠らず、實義を盡して神詣に比す。

珍肴

仁者に習ひて山には木を植ゑ、智者の心を汲んで田の水加減を専らにし、珍肴・鮮肉の料理より、錢入らずの雜炊が後

腹病む氣遣なし。

すべて世の中は飛鳥の川の流、昨日の淵は今日の瀬となる如し。秦の咸陽宮・萬里の長城も遂には亡び、平相國の驕も一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北條・足利の武威盡き、織田・豊臣の榮も遂に一代なり。

時過ぎ世替れば、誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある中、伽羅・蘭麝の薫もかく中のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障。遊興は暫時の夢、他の富めるも羨まず、身の貧しきも歎かず。唯慎むべきは貪慾、恐るべきは奢なり。抑も田地は萬物の根源にして、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育み、寸地をも捨てず、何處にても天下

貪慾

泰平五穀成就を願ふより外更になし。

一二、草刈女

吉野臥城

遅々

疲れし夜は遅々として
かの森蔭の闇を蹈み、
若き朝は白駒に
氣息を嚙ませて訪れぬ。
なかばは夢の野を、原を、
おほひもはてぬ霧はれて、
すゞろに渡る露の風、

百合の眸の輝や。

一草ひと葉ことごとく
星の涙の珠帯びて、
清けき歌を含みつゝ、
あゝ静けさよ、野の領の。

朝草刈ると草刈女、
歩めば脚絆濡れそぼち、
名も無き花の蕊散りて、
鎌の光にこぼれ行く。

さほるゝ蕊の香をきゝて、
うたふはあはれ刈る草の
積る思を君や知る。

一曲人を愁へしむ。

あはれ若き日若き身の
生命をこむる歌曲よ。
げに勞働は力にて、
慰藉は女が歌にこそ。

一三 戊辰の昔譚

小金井 きみ子

貴嶺

十六日の頃にやありけん。落人は皆若松のほとりにあつ
めらるゝ事となりたれば、又この里をいで行きぬ過ぎゆく
道のをかしき山に、紅葉の色いとうるはしきが常磐木のひ
まよりほの見ゆるあり。又、何の林にか、皆一つらに朽葉の色
したるなど、とりゝにおもしろく、緑地錦の山、貴嶺の林
など、ことふりにたれど、外にいふべき言葉もおほえず。たゞ
ならんには行き過ぎましやと思ふに、しばしいこふだに心
にまかせぬぞ、口惜しきや。柳津といふ所を過ぐるに、いと高
き處に目にたつ寺あり。人にとへば、こゝにて名高き虚空藏
なりといふ。程近ければとて詣づるに、その石段は築きしも

よぎる

のならず。おのづからなる大きないはほを削りなしたるにて、いとめづらしきものなりけり。下を流るゝ只見川にのぞめる所は、遠方も見やられて眺望いとよし。後にきけば、わがよぎりしより日數も經で、この處にて烈しき戰ありて、疊などあけて楯となして拒ぎぬとぞ。いかにあさましき様となりにけん。

ふさはし

ゆきくゝて、十九日に高田に著きぬ。こゝは若松より二里ばかりはなれ、川一筋隔てし處にて、守より仰ありたりとて、いみじうもてなされ、落人の身にふさはしからず。空おそろし。などいひて暮しぬ。

ある日、外の方さわがしければ、甲乙二人は、刀をひさげて

せい君

朝げ

はしため

走り出でしが、やがてかへれるに、「何事ぞ。」と問へば、「この若松の、やうく安からぬさまとなりゆくを厭ひてにや、逃れんとする兵あるを、所の百姓どもいたく怒りて、敏鎌竹槍などえものを持ち集りて、皆突き殺すなり。かしこの川ばたには、首さらしたるあり、こゝの溝には、數多傷うけて、まだうごめき居るあり。」などいへど、恐ろしければ出でゝも見ず。

かくて、二十三日となりぬ。人々の物語に、我がせの君は、守の御供して若松に居たまふと聞き、さらば、今日ひる過ぎなば、行きてまみえんと子供らに語れば、いみじう喜ぶ。朝げ終りて、少しにても寒さの心がまへにと、衣解きはじめしに、家のはしため、あわたくしく階のぼり來て、「今日は、何となく城

の方物さわがしければ、包など取り揃へて置き給へ。」といふ。
「さば。」とて、解きかけし衣、そのまゝおしまるめ、とりかたづくるに、程なく筒の音とゞろき渡りて、すさまじく、晝の頃となれば、はや遁れくる人いと多し。そのさま、さまざまなる中に、いたく老いたれど、よしありげなる女の、下部の背に負はれ、あとより長刀持ちたる下部のつゞけるあり。まだうら若き女の、黒髪ふりみだし、白き鉢巻し、うるはしき衣りゝしく高からげして、鞘はづしたる長刀、かいこみ、走り來れるなどは、いと目ざましかりき。いとあわたゞしき折なるべきに、女はみなうるはしく、けはひし居たるは、そのたしなみの程思ひやられて、いとゆかしう、おぼえぬ。

かいこみ

けはひ

かねて、川一筋ありと聞きしが、かゝる折とて、舟もどゝのはぬにや、かち渡りしたりとおぼしく、もすそしほるばかりなる人もありき。かゝれば、このほとりは、人宿すやうなるさまならねば、いづくともなくまよひ出でぬ。

丸木ぶねよるべの岸に風たちち

たゞよふ末やいづこなるらむ

いかにせむ尋ねて今日こそは

君にあひ津もそらだのめにて

今は米澤へと思へど、坂下の路え行きがたしといへば、一まづひきかへして、萩のくぼといふ所に來るに、日もやうやう夕暮となりたれば、やどりもとむるに、若松やぶれたらん。

そらだのめ
え行きがたし

かにかく

にはそこの落人ならばともかくも、他藩の人をば、いかでかえやどすべきとて、いづくの家にもうけひかず。暮過ぎてある古寺に入りて、せちに頼みきこゆるに、住職たゞ一人にて、こゝも他藩の人宿すべきならねど、人救ふがつとめなれば、しひていなまんも情知らぬに似たり。今宵一夜は、とゆるさるゝに、いと嬉しく、足すゝぎて入りぬ。さすがに出家の情ありて、かにかくと心してもてなされぬ。こゝより若松のかた眺むれば、ほのほこかしこに起り、ことに會津の菩提寺にて、天王寺とやらんいふは、高き處にありてめでたき伽藍なりしが、今さかりに燃え上るさま、誠に咸陽宮の烟もかくやと思はれて、其のすさまじさ、物にも似ず。さながら眞晝の

やうにかゞやきぬ。(かげぐさ)

一四、女流文學

藤岡作太郎

瞳若

巾幗者流

彬々

獨占

女御更衣

我が國の女子には和歌に秀で、男子をして後に瞠若たらしめしもの、上古以來しばしば見る所なり。萬葉集の中にも、額田女王、石川郡女、坂上大耶女など、巾幗者流の作品、また決して少しとせず。されど、其の才媛淑女の彬々として輩出せるは、實に平安時代にして、この時代の文學は殆ど女流の獨占到歸し、男子は有るか無きかに、其の一隅にけおされぬ。其のかくの如くなりしは、原づくところ一にして足らざるべしと雖も、女御更衣が、各威勢を張りて權力を爭へるが、其

唱和贈答

彩華爛漫

の一主因たるべし。即ち才學ある女子は、擧つて其の招に應じて後宮に集れるなり。集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求むれば、後宮はやがて文學の淵叢、女房はすなはち文界の粹となれり。かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生れ出でたるなり。

天成の詩人

平安時代の女流文學者の中に、最も著れしものを擧ぐれば、和歌には小野小町、和泉式部などあり。散文には紫式部、清少納言などあり。小野小町は女性美の最もよく發揮せられたる一人として、常に業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、其の心に感ずる儘の歌となれるもの、風の河上を行きて、水おのづからに文をなすが如し。たゞそれ感情の

刻苦鍊磨

亞流

濃艶優麗

走るにまかせて口に上せ、敢て刻苦鍊磨をなさず、いはゆる心餘りて詞足らざるところあり。小町もまた業平の亞流にして、たゞ感情の儘に詠出す。其の詠の業平に比して、更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。

才色雙絶
多情多恨

綿々滾々

和泉式部もまた才色雙絶、多情多恨、ものに拘束せられず。怨みては咽び、笑ひては鳴り、綿々滾々として盡きざる概あるもの、實に其の性情の迸り出でしところなり。其の詩才の豊富にして、所作の多量なるは、蓋し小町の上に出づ。もしそれ、和歌の眞の價值を以てすれば、此の式部こそ業平と並べて、平安歌人中の二星といふべけれ。

寡居

放縱浮薄

逸氣奔放

機敏

源氏物語の著者は、人も知る如く紫式部なり。早く夫に後れて寡居せる時に、此の大著を成し遂げたるなり。性貞淑にして節操の譽高く、其の德行は千載のもと婦女の龜鑑とするに足るものありしを以て、其の詞想もまた放縱浮薄なる當時の人情風俗を描寫しながら、何處ともなく氣品高く、同情に富み、其の筆致もまた逸氣奔放の風なく、順良謹慎にして長所に矜らざる趣あり。

清少納言に至りては、其の性情まさに紫式部と相反し、機敏にして才情溢れ、しばしば人を驚せり。其の著枕草子は、多く彼が遭遇せる事實の追憶、さらずば時々をりくの見聞感想にして、秩序も無く筆に任せて書き連ねたるものなり。

澀滯

眞率

警拔

寸鐵人を殺す

しかして其の文を行るや、奔放にして自由、些の澀滯を見ず。僞らず飾らず、眞率に彼が本來の面目を曝露し來りて、其の驕慢なる虚榮心の隨處にほの見えたるものをかし。しかも其の觀察は緻密周到を極め、其の言句は痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如きものあり。

かくの如くにして、紫式部と清少納言とは、其の相反せる性情と著作とによりて、平安時代の文學を飾れるなり。其の他、赤染衛門・伊勢大輔等も、また此の時代にありて名を知られたる才媛なり。

降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王・宮内卿あり。散文に阿佛尼あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にし

高雅

て、當時和歌を以て著れし雅家・有家・通具・家隆等も及ばざる所ありきといふ。されど此の時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室、其の著十六夜日記の文詞短くして意長く、平易にして高雅なり。其の地勢形勝を敘して簡明なる間に、處々旅情をのべ、怨恨の念を洩し、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を味ふことを得べし。

跋扈

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑下せられ、武人ひとり天下に跋扈する情態となれり。さればまた平安時代の如き才媛の輩出するを見ること能はず。たゞ戰亂の世にありて、小野お通の博學にして文をよくし、十二段草子を作れりといへるは珍し。徳川氏天下を一統して文教

推獎

を奨勵するに至りても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべき者を見ず。中につきて、加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於ける、やゝ見るべきあるのみなり。千代女の、郭公ほとゝぎすとてあけにけり。の句は、人のよく知る所なり。荒木田麗女の月の行方池の藻屑は三鏡の後を續ぎ、以て慶長の頃に至るまでの歴史を述ぶ。我が國女流の歴史家として人の推獎する所なり。

我が國の女流文學は、かくの如くにして明治聖代の文化に入ることを得たり。王政の維新と共に、女子教育日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究發明に心を潜め、生存競争に力を盡すべし。

研鑽

此の時に當りて、女子たるものまた我が固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。

(國文學史講話による)

一五、ヴィクトリヤ女皇 その一

下田 歌子

一千八百九十七年六月二十二日を以て、金剛石の大祝典即ち即位六十年の記念式を英京倫敦府に舉行せられ、あらゆる世界の幸福と榮譽とを、老いて猶健かなる雙肩に擔へる人を誰とか爲す。曰く、大英國女皇ヴィクトリヤ陛下、其の人なりとす。女皇年七十八、嗚呼、實に女皇は慈仁英明の君主

毀譽褒貶

不世出

にして、而も亦眞に多福多幸の婦人なりといはざるを得ず。凡そ人の毀譽褒貶に關れる公評は、棺を蓋ひて後始めて定るを常とす。如何に不世出の英傑たりとも、其の生前に於て、皆盡く善と稱し、賢と贊せられし者ありしを聞かず。否、萬善の稱贊を許さざるのみならず、譽の集る處、毀も亦從ひて來ること實に甚しきものなり。

然るを、ひとり女皇ヴィクトリヤ陛下は、彼の愛蘭の反對黨員をして、宇宙今古の名婦を選ぶにあたり、尙且指を女皇に屈せざるべからず。と云はしめたり。即ち、余が女皇を以て慈仁英明、多福多幸の人なりと云ふ所以なり。今爰に女皇が日常の起居動作について、一二見聞せし處の儘を抄記すべ

抄記

し。

女皇が常住のウキンザー宮殿は、車馬喧轟せる倫敦市街を離れて、氣晴れ風靜なる田圃の中に在り。宮は往古の城砦にぞあるらん、外壁の石垣は苔の衣縁深くして、古色蒼然たる影は周圍の流に落ちたり。神さびたる森の木立、雨呼ぶ鳩の聲を霞めて、晴陰常なき驟雨の雲、古寺院の檐端に迷へり。抑も、大英國の旗影翻る所、常に太陽の隠るゝこと無く、洋の東西南北に跨りて、幾多廣大なる殖民地を統御し給ふ女皇陛下の御住居、紫微九重の大廈高閣、莊嚴美麗の結構は、其の程にぞあるべきと、兼ねて腦裡に畫き出し、理想の蜃氣樓殿に比べては、何と無く意外の感あり。事のさますべて花や

古色蒼然

紫微九重

蜃氣樓殿

燦爛玲瓏

殿宇

しつらひ

ひさかた

極目



皇女アリトクイヅ

きたらず、素朴にして物深げなり。宮に入れば、大小の溜の室あり。客殿あり。食堂あり。新奇の珍寶、古代の武器、名將勇士の遺物等を以て、よき程に飾られたる間、毎々々の配置體裁、さすがに是の國の富も知られて、燦爛たる黄金の光、玲瓏たる珠玉の色あやに、目ばゆき殿宇のしつらひ、是等はみな公衆の望に任せ、何人にも縦覽を許さるゝ所なりとす。

ひさかたの虹に似て高く懸り、長く亘り緩く廻れる廊を過ぎて、引かれて入りしは樓上の一小室なりけり。極目鬱蒼たる御苑の林は、やがて外面の森に續きて、雨後の青烟濃か

寶算

なるも愛でたし。侍ふ女官の案内に連れて、女皇が御座の室に参りぬ。室の廣さ、僅に我が三十疊敷許りにもやあらん。洋館にて三十疊敷が程なれば、極めて狹小の室なり。南西の窓のもとに、幅廣き書卓を据ゑて、其が邊りの臂掛椅子に凭り給へるぞヴィクトリヤ女皇陛下には渡らせ給へる。御身には黒き琥珀やうの絹帛、黒きレースに飾られたる極めて質素なる服を着け、頭には小さき室内帽を戴き給へり。寶算既に七十八歳の高齢に渡らせ給ふと傳へ聞けども、打ち見参らせたる所は、やう／＼六十許りが程とぞ覺ゆる。尙、ふくやかに艶めきたる豐頬、小く引き締りたる口元、にこやかに笑み給へる時は、愛嬌の溢るゝやうに見えて、慈悲深げなる御

豐頬

炯々

巍々乎

芳紀

顔ばせ、えも云はぬ和徳を有ち給へるものから、屹と打ちまもり給ふ御眼ざし、炯々として犯し難く、御身の丈は低けれども、巍々乎として高く聳えたる天然の威儀、げにその昔戴冠式場に臨ませ給ひたる時、芳紀僅に十八歳、黄金の髪ゆるく束ねて、白玉の光麗しき御肌に、深紅の長衣を着流し給へる、いとゞもてはやされて、めでたく神々しく、靜に玉座に登らせ給ひし程、男も女も老いも若きも、ひとしく涙押し拭ひて、暫時は仰ぎ見る者無かりきと聞きしは、さることにもぞありけらし。その當時の事どもの、ふと我が胸にぞ浮び出でたる。

其の時間はせ給ひしことは、我が英國に滞在の日數、其の

稱賛

愛でたしと感じ、厭はしと思ひしは何物ぞなど、又日本女子の教育は、長足の進歩をなしたりと聞く。いといみじき事かな。これも、賢明なる皇后陛下の御功にこそなど、且日本固有の禮服の優美高尙なることゞもをぞ宣ひたりける。其の頃は日軍戰捷の折からにて、他人に在りては、誰もゝ其の勝利を稱賛して、先づ其の事を問ひ聞くが、一つの御世辭のやうになりつる時なりしかども、女皇はひとり其の軍事の上になんては、一言も御口頭に登せられざりけり。げにその平素公私の別を能く判然と區劃せらるゝこといみじく、情をもて義を犯さず、義をもて情を強ひず、其の極めて親しき婦人輩にも、女子が上に互れる外、政治上の事には更に談話を

鳩の杖

及し給はざりきと聞きしにも違はず、いとあらまほしくぞ思ひたりし。此の御話の時間は、大凡二十四五分が程なりけん。諸共なりし夫人の、いと畏し。さこそは勞れ給ひけめ。辭し申さばや。」と忍びて我に云はるゝに、げにとて、罷り出でんとせしかば、女皇は、更に、よくぞ參り申したる。とて、入り口の方に立てりし女官に目くばせし給へば、打ち畏りて御前に參りぬ。何やらんさゝやき給へりしが、女官は我等に向ひて、此所には御覽すべき程の物も在しまさねど、古き繪どもの少しめづらかなる物ぞ侍る。好み給はゞ案内せよと仰せ候なり。」と傳へらるゝに、いと忝きよしを申して、御受したれば、女皇は靜に御身を起して、御椅子に寄せかけたりし鳩の杖に

すがりて、御座を離れ給ひぬ。

みじろく

此の間、女皇が御傍に侍立して、時々其の顧問に答へ、又は女皇が打ちみじろき給ふ折々、御旨を伺ひ御身を支へなどしたる貴婦人は、薄鼠色の毛布に同じ色の絹布を、所々に縫ひ交ぜたる、いと淡泊清素なる裝飾裾さへ短き衣服を、着なされたる。其の容貌何とやらん見しことのある様に覺えたりしかども、斯かる折なれば、唯無禮氣なることゝもの無かれかし、御詞聞き僻めじと念じつる程、え思ひ出でざりしを、御前すべり出で、後に、内親王クリスチャンに渡らせ給ひきと人の告げたるにて、さてこそ、往ぬる日某の慈善會にて見參らせし御方よと、やうやくに思ひ出でつれ。若し仄見

淡泊
清素

羅希

贅

もせず、又其の人と聞く事も無かりしならんには、必ず尋常の女官とこそは覺えたりけめ。女皇は、極めて謹恪嚴肅なる御家庭に生ひ立たせ給ひ、幼かりし程より、能く各國の語に通じ、羅希の文章をさへ能くし給ひしは云ふも更にて、其の他の學問技藝に於ても、造詣深くおはし、算數家としても、畫工としても、又音樂家としても、其の道の上手と稱へられぬべき程の技倆を備へ給ひたりしが、又其の所生の諸皇子、女を教育し給ふことの、嚴に且足らひ給へりしことは、誰も誰も知るところにして、今更爰に贅する迄も無し。

一六、 ヴァイトリア女皇 その二

莊重

祈禱

代參

こちた

女皇が仁慈英邁の資性、莊重謹恪の行爲は、其の基づく所敬神の教により給ひたるものゝ如し。ウキンザー城内の寺院には、日曜日毎に自ら詣で、祈禱を捧げ神歌を唱へ、尙且僧正が法話を聽き給ふ由なるが、此の兩三年少しく僕麻質斯を惱み給ひて、例ならずおはする事もあるが故に、折々は常侍の女官をして代參せしめ給ふとか。女皇が在しましける室の、おもひの外に狭かりしは云ふも更に、隅の節棚の上に打ち置かれたるものも、總て綺羅びやかならず、はた餘りにこちたからず、唯一枝の花、數冊の書籍の、所得顔に御机上を場所取りたるものと心憎くぞありける。午餐の食品も、其の味こそ佳なりけれ、決して多くの珍味などは賜はせざ

襪襪

微行

りき。但し、この日は眞に内々の御まねきにて、唯同國の夫人等を朋友として呼び給へる時の如き扱ひなりと承れば、これぞ女皇が平素の飲食起居の御さまなりけらし。其の當日の感、余はいかにしても、この古宮殿の内に、斯かる閑靜なる生涯を送り給ふ御方の、全世界中一千百萬哩の領地と、四億の住民とを支配し、國家の富額一千八十億磅と計算せらるる國王の御有様とは思ふこと能はざりき。實に女皇が其の襪襪の裡より養はれ給へる儉素の徳の結果とこそ申すべけれ。

女皇は時々輕車を驅りて市街を微行し、店頭に到りて御自ら物購ひ給ひ、孫宮たち、又は侍臣等に賜はせ給ふ事も屢

なるよし。分けても、新發明の器具物品を賣り出したる店、或は慈善事業のために設けたる所などへは、勉めて渡り在し、まして、餘りに必要には在せじと思はるゝ物をも買ひ調へ、給へりとぞ。こはこれ商工業獎勵の御心よりと承り及びぬ。又、佛蘭西の大統領、カルノー氏の暗殺せられし時、警保部内の人々、痛く心を惱して、是非に特務護衛を附け參らすることを勅許ありたし。と内々に奏し申し、に、女皇はこれまで狂漢が狙撃の毒手を辛く免れ給ひしこと數回にして、其の當時、大厄は我を靜肅にす。と宣はせしこともありし程なれば、固く之を拒みて、我は狂暴者をして、さすがに婦人は脅嚇し易きものと満足せしむるを欲せず。とて、更に其の奏

凶報

親電

洞察

請を容れ給はざりしが、其の後絶えて何等の凶報も聞えざりき。女皇は、かくの如く、剛毅大度の女性に在しませども、亦深く仁愛慈悲の徳に富ませ給ひて、物の憐を汲み知り、給ふことこよなかりけり。其の程、カルノー氏の新寡婦にいち早くも寄せ給ひし親電に、深く君が良人の枉死を傷む。無限無量、同感の情、希くは洞察せられよ。朕も亦、良人を失へる婦人なるが故に。と。此の數語、實に女皇が外交上に巧なる世辭的の口調のみにあらずして、其の眞情より溢るゝ所、痛く故大統領夫人に感謝の意を厚からしめたりとは、其の頃親しく傳聞せしことなりかし。

げにや、主務大臣の死刑宣告を奏上する毎に、女皇が顔色

暗涙

いみじ

蘇譯

裨益

は忽ち蒼白と變じて、見る／＼暗涙を雙眼に浮べ給へる、いと痛はしく、畏さの置き所無きに、女皇は、必ず、卿よ、何としてもそを助くる道は無きか。卿よ、希くは再考せよ。」と繰り返さるゝを常としければ、此の種の宣告書のみは、遂に代りて主座大臣の手に取り扱はるゝことゝなり、其の死刑に處せらるゝ者も、女皇の即位の當時に比すれば、大に減少せりと傳へ聞きたる、いといみじき事とぞ覺ゆる。

女皇陛下の父母の御上、及び、降誕の御程より、近時の御事まで、大方は載せて刊行の女皇傳に在りと覺ゆ。且、其の概略は既に翻譯にかゝるもあるべし。世の婦人たらん者、若し能くこれを繙かれんには、爲に裨益する所甚だ少からざるべし。

蠡斯振々

し。女皇は、實に帝王として、君主としての好模範たるのみならず、尋常普通の家の主婦として、人の妻として、人の母として、亦誠に得易からざる賢明の婦人たるなり。嗚呼、皇天上帝の女皇に假すに長壽と富貴とを以てし、之に加ふるに、蠡斯振々の榮を以てす。女皇が多福多幸なる、實に偶然にあらずるなり。近來傳ふる所の失明の風評、願はくは誤聞妄説に歸し去らんことを望む。(明治才媛文集)

一七、一兵士が其の妻に與へたる遺書

千九百十四年十二月、文學者協會は左に掲ぐる、元料理番を職とせし者にして已に戦死せる一兵士ジョルジ・ブランが其の妻に與へた

る遺書を印刷に附して各學校に送付し、生徒一般に對し、特に揭示せしめたり。

拜復

決して我が身を御案じ下さるまじく候。やがて御身及び愛兒レイモンに再會し得べき望もこれあるべしと存候。何卒レイモン共々御身も御自愛專一に成し下され度、若し御身にあれ、子供にあれ、病氣の事もこれあり候はゞ、これ却つて我が恨とする所に御座候。

祖國

さて、祖國の爲に一度劔を執つて戰に出で候上は、一死以て祖國に奉ずるは、元より覺悟の前に御座候間、たとへ一朝我が身に事あり候とも、今より十分の覺悟致し置き、其の場に

至りて取り亂し不覺を取らざる様、切望に堪へず候。若し戰死致し候とも、小生は萬事を御身に依頼して心を安んじ申すべく、些の心残りも御座無く候。何卒我が子を成育せしめ、一人前の立派なる男子とし、御身の力限り相當なる教育を受けさせられ度願ひ上げ候。

我が子成人致し候上は、父は祖國の爲、汝等子孫の爲に、此の戰場に死したる旨、よく／＼申聞け下され度候。

斯く申候も、こは後々の爲をと存じ候ひしのみ候。他日御身と共に我が子の養育を樂しむべく候。さはさりながら、前申上候如く、運命は豫め料るべからず。殊に今日の場合、今夕の命も知るべからず候間、我等は萬事を顧慮せず、只銃劔

を執つて突進し、敵を破るのみに御座候。(中略)

さらば最後に今一度繰り返して申すべく候。小生は只御身を信じ、御身の雄々しき心に頼り候。これ以上申上ぐるは却つて御身を煩すべきのみと存じ候間、今は最早申上ぐる事も御座無く候。

さらば、偏に御身と我が子レイモンの幸福を祈り上候。

早々。

一八、平家の都落

高山林次郎

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀にもまた目覺しきは無かるべし。

餘燼

凌辱

一門譜第
一炬の煙

鳳闕
椒房

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたにも隠家は無きか。いざさらば己みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍ばまし。あはれ生死も知らぬこの別れ路、再び歸り來べき都ならねばとて、六波羅・池殿・西八條以下、一門譜第の邸宅・宿房、京・白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬること、あわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元こ

翠華搖々

のかた、天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、燒野の原と
かへりみて、末は煙の浪、雲の浪、行方も知らずさすらふらん。
直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれど、詠歌の餘哀
になれて、弓矢の譽を勵まん心地せず。さても捨て難き命や。
今こそは憂き世なれ。流石にしのばるゝ昔のさまの夢に入
るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到ると
ころ野に滿てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を並べて十萬
餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人、行方の空はわ
かねども、身にしむ秋はあざむかれず。渚に寄する波の音、袂
にやどる月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づ
る山の端を、あなたの空とやおぼしけん。日暮、舳に立ちて笛

煙波

吹く人あり。響はとほく煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を
そばだつ。嗚呼、此の時、此の人の懷果して如何ぞや。

(栲牛全集)

一九 忘れ難き此の日

姉崎 嘲風

健在

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗か
に南風薰ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは
恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上
艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見わかぬまで
に消え失せぬ。健在なれ。再び早く相見ん。との別の言葉は尙
耳に響き、最後の握手尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗

埠頭

悶を遣る

孤影蕭然

首途

飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入り、き、嗚呼かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方、足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り、日は逝きて、五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然、欄に凭りて無限の感に沈ましむ。

「三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方、函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜、月明に星稀に、一灣の風光、恍として夢の如し。中宵欄に凭りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢

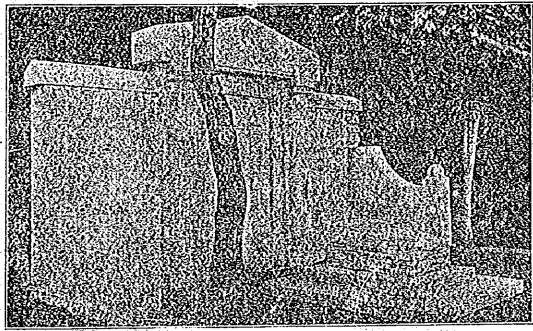
の果敢なきを歎きぬ」と。

泡沫

暗澹

久戀懷慕

銷魂



高山橋の墓

人生遭逢のいとも果敢なきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、ひとり我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば、有渡の山影がすかにして、袖師の松原雨に朧なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、總て暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是彼が久戀懷慕の處なりき。

此の夜、此の風光、是彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊

流轉の世

の如く、風光昔のまゝにして、彼が友は已に歸り來つれど、彼とその姿とは今や尋ぬるに由なし。昨日は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今宵五年前の今日の別離をしのんで、彼が遺文に對す。嗚呼われ此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。

悠久
餘薰

されど徒に憂ふるを己めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂を深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして、夜靜なり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風

款晤

匆忙

幽明相隔つ

濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼平生憂を同じうせる彼と我と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我とはとこしへに相伴はん。

歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返さん由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ。有渡山下、友の墓邊に風靜なれ。而して我は此處に懷かしき我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

二一、俚諺十則

- 一、飛んで火に入る夏の蟲。
- 二、名人は人を譏らず。
- 三、太きには吞まれよ。長きには捲かれよ。
- 四、怪我の功名。
- 五、雨降りて地固まる。
- 六、龍馬のつまづき、猿も木から落つ。
- 七、我が身をつみて人の痛さを知れ。
- 八、正直の頭に神宿る。鬼神に横道なし。
- 九、牛は牛づれ、馬は馬づれ。
- 十、麒麟も老ゆれば驚馬に劣る。

二二、吾が輩は猫である

夏目漱石

作戦計畫

吾が輩は猫である。吾が輩は今夜こそ鼠を捕つてやらうと思つて、種々作戦計畫を運して居たが、夜はまだ浅い。鼠はなか／＼出さうにもない。大戦の前だから一休養を要する。勝手には引窓がない。座敷なら欄間といふやうな處が、幅一尺程切り抜かれて、夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めて居る。惜氣もなく散る彼岸櫻を誘うて、ざつと吹き込む風に驚いて目をさますと、朧月さへいつの間にさしてか、竈の影は斜に揚板の上にかゝる。寝過しはせぬかと、二三度耳を振

直徑

つて家内の様子を窺ふとしんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。戸棚の中でごとくと音がした。小皿の縁を足で押へて、中をあらして居るらしい。こゝから出るわいと、穴の横にすくんで待つて居る。なか／＼出て来る氣色はない。皿の音はやがて止んだが、今度は井か何かにかゝつたらしい。重い音が時々ごとくとする。而も戸を隔てゝすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと直徑にしたら三寸も離れて居らぬ。時々はちよろ／＼と穴の口まで足音が近寄るが、又遠のいて顔を出さぬ。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾が輩はちつと穴の出口で待つて居らねばなら

舞踏會

ぬ。随分氣の長い話だ。鼠は旅順碗の中で盛に舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩のはいれるだけ、おさんが此の戸を開けて置けばよいのに。

今度はへつつひの陰で、吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍び足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。しばらくすると、風呂場で、うがひ茶碗が金盞にかちりと當つた。今度は後方だと振り向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨の袋を落して、縁の下へ駆け込んだ。逃すものかと續いて飛びおりたが、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は

先天的

頑張る

小癪

敵愾心
崇高

先天的に鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の眞中に頑張つて居ると、三方面とも少々づゝ騒ぎ立てる。小癪といはうか、卑怯といはうか、到底彼等は君子の敵でない。吾が輩は十五六回は、あちらこちらと氣を疲らし、心を勞らして、奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。殘念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、如何なる東郷大將も施すべき策がない。初は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美德さへあつたが、遂には面倒と、馬鹿げて居るのと、眠いのと、疲れたのと、臺所の眞中にすわつたなり、動かれないことになつた。し

輕蔑

徑路

かし、動かないでも八方睨みをやつて居れば、敵は小人だから、大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つたものが、存外つまらないと、戦争が名譽だといふ感じが消えて、にくいといふ念だけ残る。にくいといふ念を通り越すと、張合が抜けてぼうつとする。ぼうつとした跡は、勝手にせよ、どうせ氣の利いた事は出来ないのだからと、輕蔑の極眠たくなる。吾が輩は以上の徑路をたどつて、遂に眠たくなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前に在つても必要である。

二三、 洪 水

建 部 綾 足

或年の八月初つ方、急ぐことのありて、雨風をも厭はず、日

の暮方に熊谷の驛を立ち出で、そこより三里ばかり先なる、高原といふ處の某寺まで行きて宿りけるに、子の初にもやありけむ、一きは荒き風の、どつと吹き出で、三度ばかり吹き通るよとおぼえしに、厨の西廂に立ち添ひたる大なる杉の、ひうくくと鳴り渡りて、三本まで倒れかゝりぬ。此方の佛を据ゑおき奉る方の屋根は吹き放されて、雨の吹きかゝる音は、瀧なす鳴り響き、風は横様に吹き入りて、方丈の壁はあるかぎり崩えおちて、燈も皆消えつ。

瀧なす

たけび罵る

たゞいたづらに立ち騒ぐのみにて、人も我も爲む術無きに、麓の方より、男女の聲にて、事も分かねど、唯たけび罵りて駈け登る音す。こは川水の溢れ入りたるを逃れて、此の寺に

續松

逃げ登るらむとて、續松などいへど、火とては鑽り出さむてだてもあらず、今は如何にならむぞ。といひ居るに、大方にわめき登りて、御寺の主やおはする。唯今此の地は海となりて、地の底に落ち入りにき。まだ此の山の残りて侍るに、生



建部綾足筆蹟

き残りたる者は、かく逃げ登りて侍り。かゝる間にも潮の立ち満ちて、此所も海の中にや紛れ入り侍らむ。さるにても、露の間は命免れ侍らむ。足倉を作りて堂の上にはひ登りて侍らば、如何に深き海となるとも、暫時は免れむ。いざ足倉をせ

とよむ

常世の長鳴
鳥

よ。とて騒げど、いと暗きに、雨風の止まねば何せむともなし。そが中に、親を呼び子を呼び、兄よ弟よなど尋ね惑ふ聲止まず。寺はいと高けれど、門邊間近く水のさし入りたるにや、波の捲き反りて鳴りとよむ音、如何なる荒磯にも比ぶべくもあらず。いかにせむ。かゝる世の極みも侍ればこそ、言ひ傳へ侍るなれ。かくてありとも、夜明けもてゆかば、物の色目見え侍らむに、ともかうもせむずる。とて、人皆立ち集ひてある間に、倒れたる軒のしたにて、曉を告ぐる鶏の聲の、三こそ四こそきこえたる常はさもあらぬを、かゝる時に聞きてはいと頼もしく珍しくて、何となく心も落ち居たり。大御神天の岩戸に籠りましゝ時、世の中闇かりしかば、常世の長鳴鳥を鳴

かしめきとあるは、かゝる時の事なりけむと、いと尊く思ひ合せられぬ。

玉藻なす

ゆくりもな

人々も、これが聲を聞きてよりは、力得たる様して、夜もはや明けむず。とて待つに、東の空のやうく白みたるに、よもやまを見れば、遠き山のみは仄に見ゆれど、世は唯其處此處となく海となり果てゝ、をちこち玉藻なす浮み漂へるもの見ゆるぞ、森などの梢にかも侍らむ。といふなり。さて、明け行くに、連れて、物の顯れ出づるに、麓の家村は秋の薄の山嵐に吹きなえたる様にて、ひし／＼と伏し倒れたり。まして一夜のほどに、親子・妻・兄弟・親族ゆくりもなく失せたるを、今ぞ一時に聲を放ちてもろともに泣きさけぶなむいと憐なる。

八束穗

昨夜までは住み榮えし家の跡もなく流れ失せつるもあり。稻粟は八束穗に伏し垂れて、栗柿の玉なす實生りしも、いづち持ちて行きけむ。田も畑も淵瀬に變りぬ。或は、かゝるべき子に離れ、頼み思へる夫を失ひなど、はかなき世の有様に思ひ驚きて、俄に髪を落して國々を行き廻らむといふもあり。或は他の國に行きて、使はれむとて泣くもあり。かゝる眼の前なる世の様をも見る事かなと、若き心にさへいと憐に思ひしみつ。先づ人々の飢ゑ凍えて候はむを勞り侍らむと、大なる鍋に粥を煮て食べさす。

干潟

晝にもなれば、水は遠方にゆき廣がりて、此方は干潟になりしに、見れば男女とも分かぬ屍の、木の末にかゝり残れる

池の玉藻

遺骸

おどろく
し
いやちこ

もあり。遠近残れる溜り水に、髪どもは搔き亂れて池の玉藻と見ゆるもあり。其の外、石川の貝に交りて打ち臥せる人の遺骸は、かき算ふべくもあらぬに、昨夜のおどろくしかりしよりは、物のいやちこに憐なる様を見るなむ、立ちまさりて悲しかりける。それが中に、物にとりつきて、辛き命を拾ひて、ゆくりなく歸りしもあり。或は屋根に乗りて、二人三人が逃げ歸りしなどもあれど、家も垣も無くなりたれば、生きて世に乞食の者となりはてむ事よ。など、くれぐれといひ出で、果てしなく泣くもあり。又その中には、思の外なる寶を拾ひて、やがて家も田も買ひ求めて、門なみ廣げむと競へるもあり。是等をや定めなき世の習とは言ふならむかし。

さて、人の言ふを聞けば、これより下つ方の國所は、荒川などいふが、利根川に流れ合ひて、若干の堤どもは有るかぎり崩え落ち、十里ばかりの間は、げに海となれり。其の中の家村より始めて、宮寺も多く流れ失せ、野山に住める獸までも生き存へたるはあらず。熊谷の驛も、堤の崩えたりしかば、大方は水に漂はされて、人も多く死につといふ。しからば、我がかく参り來しは命を免れむとてなりけるよと思へば、いと尊かりけり。

二四、信越紀行 其一

下田、歌子

今年は暑に入りても、炎熱のいとさ許り烈しからねば、山

行きかひ

玉筐

みすゞかる

嗚呼がまし

恥ぢかゞやかしう

水の隈求めて、都の夏をよそに遊ばんの心も薄かるべし。況して中央氣象臺よりは、しば／＼暴風の警報を傳ふるなど、世の中何となく物騒がしき心地するに、この雲の行きかひ少し定りて後にこそ出でば出でぬ。など人はいへど、我等は始よりすゞしき蔭を尋ねんの願にもあらず、先づ玉筐、二荒の山の假宮に渡らせおはします姫宮たちの御氣色伺ひ奉りて、さてみすゞかる信濃の國より三越路の果までもと思ひ起しぬるは、ひとへに我が女子達の教の道のためなりけり。かういはんは、いと嗚呼がましうさかしらにさし過ぎたらんやうの誹はさるものにて、才短く徳薄き身には、中々に恥ぢかゞやかしう、力にあまる重荷負ひて遙けき道に出で

いたづ

そのかし
聞ゆ

おもと

さうぞく

たゝんことの空恐ろしきまで覺ゆれど、畏き大御惠の露に
濕ふ身のかゝる大御代に生れあひたらんかひには、せめて
は心の及ばん極み、身のつゝかにかぎり、盡しまつらでやば
と思ふことの片端語りいでたるに、いと善き事、さらば、吾等
も同じ心にと、力添へて諸心にいたづき勵さるゝ友達の助
により、やがてさす方にも至りつくよしもがなと、公の事の
ひまゝに營みたてつる帝國婦人協會と云ふものゝ集り
に加はらんとある人、さては尙さらぬもそのかし聞えば
やなど、彼是語らひ合せて、しばし身のいとまを請ひまつり
つ。諸共なる人は、同會の理事、同掌事のおもと、さては侍女一
人を俱してさうぞき立つ。なほ、をしへ子の一人は、夏の休の

あからさま
さは
人やりなら
ぬ

程信濃の親里へ歸らんとあるに、同じくは従ひまゐらせん
とて、今日まで待ちつゝありしを伴ふ。昨夜より、暑さの俄に
添りて、蟬の羽の薄き衣も、肩に重きばかり覺えしを、今朝は
空曇りたれど、蒸すやうにていと苦し。午前九時の發車にお
くれじと、人々打ちそよめきて、八時ばかりに家を離る。あか
らさまの旅路にもあり、心に希ふこともさはなれば、人やり
ならぬ都の別れに、袖絞るべくもあらねど、とまりぬる人の
名殘惜しむがいとゞ苦しきに、朝な／＼こよなき心の慰め
にして、手づから水そゞぎなどせし朝顔の、旅寢の程に衰へ
やしなましとおもふがいとあはれに覺えて、立ち出でがて
に、目とゞめつゝ見る程、時おくれぬべしと、人の云ふに驚さ

れて急ぎ出づ。

二五、信越紀行 その二

無下

同十九日、朝小雨ふる。けふは六工社の製絲見んとて、まだきより出で立つ。この工女は、大方この地の住人にて、舊土族の女兒も多く交れりと聞きしが、げにその勞くさまも、世の工業に従事せるものとかはりて、人がらも無下に卑しからず、女學生などやうの心地するは、いとあらまほし。傭主もことに心して、夜は二時間許りづ、讀書・算術等を學ばせらるゝよし。いといみじきことなりや。されど、地形のいと狭小なるからに、人の心もようせずば、それに伴はるゝこともぞ

あらまし

自餘

あげつらひ

おぼえ

あらん。軒端傾き壁落ちたる屋どもの多く見ゆめる、行末のあらましをかくれば、いとほしう覺ゆることも少からず。すべて世に優れたる英雄を出したる後には、却りて劣りざまなる人の出で来るならひなりといふを、人の評して、餘りに優なるものゝ顯るれば、それになべてを吸收せられて、自餘はいたく劣れる理ならんかしといへるは、推し當てに強くなるあげつらひにぞあるべき。されど、一家の内にて、親或は兄なる人の抜け出でたるがあれば、世のおぼえめでたくて、さらぬ子弟まで、自ら人散ひなどするからに、彼の鷹の羽にすむ羽蟲のごと、おのれ諸鳥におぢ恐れらるゝよと心得て、爲すことも無きに他を目の下に見る、其の迷ひの夢さめ

うたてし

やらで、遂に大方の世の進みにも後るゝことこそいとうたてけれ。そのかみは中華といひけん支那の大國が、夷狄とおとしめける泰西諸國に苦しめられ侮られても、孔夫子などいひて、廟を作り御靈を崇め、かつ其の書を繙き讀みて、その精神は忘れながら、其の皮相にかゝづらへるが如く、やゝもすれば、賢人名士の詩歌手跡をのみ尊び翫びて、われ其の志を嗣がん、其の功にも超えんと企つる人の少き世こそいと悲しかりけれ。

皮相

末にのみ野中の清水流るらん

もとの心をくむ人の無き

午後二時ばかり、松代を出で、腕車して長野に歸る。八幡

つばら

原といふ所まで來つれば、小き八幡の祠のほとりに、車とゞめさせて、こゝは山本勘助が戦死の地、彼所は武田信繁が戦歿したる所ぞと、案内の者いとつばらにさし示さる。

矢叫び

矢叫びの音はきこえず八幡原

なき立つせみのこゑばかりして

心しらひ
くつろか

長野に至りつきぬるは、五時計りにやありけん。假寝の宿りなれど、主人が心しらひのいと嬉しきに、且は、此所に多く旅寝の夢を結びつれば、故郷に歸りつきぬる心地して、いとくつろかに思ふからにや、身の勞れも覺ゆることいみじければ、今宵は珍しう早う臥戸に入りぬ。

王女がいたづくさまを見て

夏引の手引の絲の長き日も

くるしきわざに身を盡すらむ

たをやめ

たをやめが手引の絲の力もて

山をもとほせくろがねも鑄よ

二六、東路の旅

仁治三年の秋八月十日あまりのころ都を出で、吾妻へ赴く事あり。まだ知らぬ道のそら山重り江重りてはるく遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しばしは前途の極りなきに進む。終に十餘りの日數を経て鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとり、或は海邊水流のかすかなる

山館野亭

しのぶ

砌にいたる毎に、目に立つ處々、心のとまる節々を書きおきつ。忘れずしのぶ人もあらば、おのづから後の形見にもなれとなり。

駒引き渡る
望月

ゆふつけ鳥
遊子

世捨人

わが

東山の邊なる住家を出で、逢阪の關打ち過ぐる程に、駒引き渡る望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧立ち渡りて、深き夜の影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様、思ひ出でらる。昔、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に藁屋の床を結びて、常は琵琶をひきて心を澄し、大和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへのわらやの床のあたりまで

こゝろをとむる逢阪のせき

關山をすぎぬれば、打出濱粟津原など聞けども、未だ夜の
うちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和
の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都うつしありて、
大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡
ぞかしとおぼえてあはれなり。

さゝ波

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみのこれる、志賀の故郷

曙の空になりて、勢多の長橋打ち渡すほどに、湖遙にあら
はれて、かの満誓沙彌が、比叡山にてこの海を望みつゝ、よめ
りけん歌おもひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波、誠に

はかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ

ながめし跡をまたぞながむる

洗滌
葦手

篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里
人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深
き松のむらだち、波の色も一つなり。南山の影を涵さねども、
青くして洗滌たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなど
生ひわたれる中に、鶯鴨の打ち群れて飛びちがふさま、葦手
を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿にこそ泊りける
が、今は打ち過ぐる類のみ多くして、家居もまばらになりゆ
くなど聞くにこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の洲瀬には限

らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより

荒れのみまさる野路の篠原

行きくれぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風夜更くるまゝに身にしみで、都にはいつしか引きかへたる心ちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊りの草の庵の寢覺もかくやありけん。とあはれなり。行末遠き旅の空思ひつゞけられて、いといたう物悲し。

都出でゝいくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ床のあき風

かたしく

この宿を出でゝ笠原の野原打ち通るほどに、老蘇の杜といふ杉村あり。下草ふかき朝露の霜にかはらん行末も、はかなく移る月日なれば、遠からずおぼゆ。

かはらじなわがもとゆひにおく霜も

名にしおいそのもりのした草

音に聞きし醒が井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄み渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほどなれば、往還の旅人多く立ちよりて涼みあへり。かの西行が、道のべに清水流るゝ柳かげ、しばしとてこそ立ちとまりつれ。」と詠めるも、かやうの處にや。

餘熱

むすぶ

道のべの木陰の清水むすぶとて

しばしすゝまぬ旅人ぞなき

しぐれわた
る

柏原といふ處をたちて、美濃の國關山にかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、嵐松の梢にしぐれわたたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心ほそし。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板びさし年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌思ひいでられて、この上は風情もめぐらしがたければ、賤しき言の葉を遣さんもなかゝにおほえて、此處をば空しく打ち過ぎぬ。

なかゝ

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくる程に、河端に立ち出

花洛

で、見れば、秋の最中の晴天、清き河瀬にうつろひて、照る月なみもかす見ゆるばかり澄み渡れり。二千里の外の故人の心、遠く思ひやられて、旅の思いとゝおさへ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花洛を出で、三日、株瀬川に宿して一宵しばし、幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつゝ遠情を前途千里の雲に送る。など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寢の月を見んとは (東園紀行)

二七、俊基朝臣の東下り

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれしのを、召し捕はれて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、また今度の白狀共に、専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、また六波羅へ召し捕はれて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

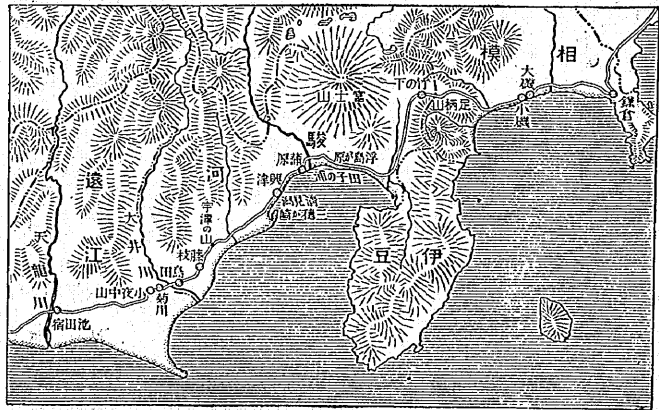
片野の春の
櫻狩

落花の雪に踏みまよふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほだにも、旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり浅からぬ、我が故郷の妻子をば、

行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限と顧みて思はぬ旅に出でたまふ、心のうちぞあはれなる。

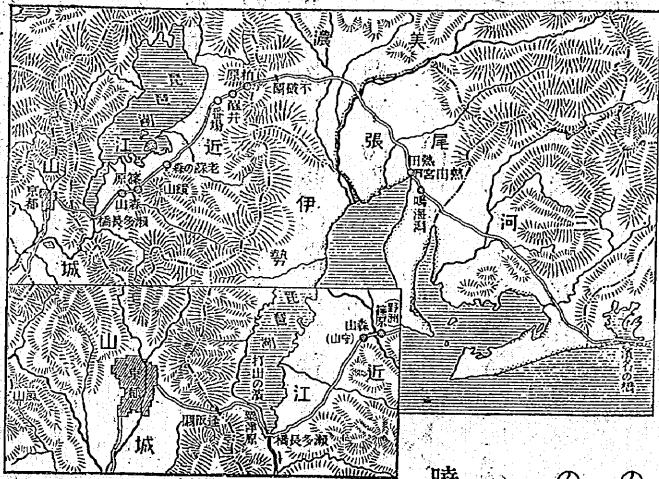
鹽ならぬ海

憂きをばとめぬ逢阪の、關の清水に袖濡れて、すゑは山路を打出の濱沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船のうきしづみ、駒もとゝると踏み鳴らす、勢多の長橋打ち渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間に、おいそのもりの下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲



や隔つらん。
 番場醒井柏原、不破の關屋は
 荒れ果てゝ、なほもるものは秋
 の雨の、いつか我が身のをはり
 なる、熱田の八劔伏し拜み、汐干
 に今やなるみがた、かたぶく月
 に道見えて、明けぬ暮れぬと行
 く道の、末は何處ととほたふみ、
 濱名の橋の夕汐に、引く人もな
 き捨小船、沈みはてぬる身にし
 あれば誰かあはれとゆふぐれ

入相



の、入相鳴れば今はとて、池田
 の宿に着き給ふ。
 旅館の燈幽かにして、鶏明
 曉を催せば、匹馬風に嘶えて、
 天龍川を打ち渡り、小夜の
 中山越え行けば、白雲路を
 埋み來て、そことも知らぬ
 夕暮に、家郷の天を望みて
 も、昔西行法師が、命なりけ
 り。と詠じつゝ、二度越えし
 あとまでも、うらやましく

隙行く駒
亭午

ぞ思はれける。

隙行く駒の足はやみ、日己に亭午にのほれば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を叩きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられしとき、

昔、南陽縣、菊水、汲下流、而延齡。

今、東海道、菊川、宿西岸、而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめむ

龍頭鵠首

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鵠首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。

島田藤枝に懸りて、岡邊の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、薦楓いとしげりて、道もなし。昔、業平の中將の、住む所を覓めんとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

おりたつ田子

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎、興津、蒲原打ち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や淺き船浮けて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。(太平記)

二八、明治天皇の御製

○さし昇る朝日の如く、さわやかに

もたまほしきは心なりけり。

○四方の海皆はらからと思ふ世に、

など浪風のたちさわぐらむ。

○白露のおきふし毎に思ふかな、

民の草葉のさかゆかむ代を。

○おのがじゝ務を終へし後にこそ、

花の蔭には立つべかりけれ。

○樞原のとほつ御祖の宮ばしら

建てそめしより、國は動かず。

○おのが身を修むる道は學ばなむ、

はらから

なりはひ

賤がなりはひ暇なくとも。

○軍人いかなる野邊にあかすらむ、

蚊の聲しげくなれる此の夜を。

○子らは皆軍のにはに出ではてゝ、

翁やひとり山田もるらむ。

○おもほえず夜を更しけり、國の爲

たふれし人の物がたりして。

○世とともに語り傳へよ、國の爲

命をすてし人のいさをは。

○時はかる器の針のともすれば

狂ひがちなる人の世の中。

たらちね

○たらちねの親の心を慰めよ、

國につとむる暇ある日は。

○玉川の清き流にやどりても、

なほおぼろなる春の夜の月。

○荒磯の松の木蔭に、しほ風を

よきても咲ける山櫻かな。

○涼しくも月の光になりにつけり、

波の洗ひし濱のまさご路。

○長くなりまどかになりて、蓮葉に

まろぶも涼し、露のしら玉。

○政いでゝ聴く間は、かくばかり

暑き日なりと思はざりしに。

○ 寄りそはむ閑はなくとも、文机の

上には塵をすゑずもあらなむ。

○ おく露の光になりて更けにけり、

花野のすゑの秋の夜の月。

日本女學讀本卷七終

大正八年十月二十五日印刷
大正八年十月三十日發行

日本女學讀本全八册

定價
卷一より各金參拾九錢
卷四まで各金參拾九錢
卷五より各金參拾參錢
卷八まで各金參拾參錢

編者兼 發行者 帝國婦人協會

代表者 東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷參百九拾番番地 井出 豐作

印刷者 東京市神田區三崎町三丁目一番地 楯山 定吉

印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地 友文社

不許複製

發賣所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話 神田二三九八番

下
523